

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第169集

岩村田遺跡群

西一本柳遺跡XVII

長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡XVII発掘調査報告書

2009. 3

佐々木 薫

佐久市教育委員会

例 言

1. 本書は、佐々木 薫が行う店舗建設に伴う岩村田遺跡群西一本柳遺跡XIIIの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 佐々木 薫
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名 西一本柳遺跡XIII
5. 所在地 佐久市岩村田字常木上2328-1
6. 調査期間 平成20年9月30日～10月9日
7. 調査面積 102m²
8. 発掘調査の組織
調査主体者 佐久市教育委員会 教育長 木内 清
事務局
社会教育部長 内藤孝徳
社会教育部次長 柳澤本樹
文化財課長 森角吉晴
文化財調査係長 三石宗一
文化財調査係 林 幸彦、並木節子、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、神津 格、富沢一明
上原 学、出澤 力
調査担当者 須藤隆司
調査員 河原田三男、河原田憲子、小井戸秀元、小井戸厚子、中嶋フクジ、細萱ミスズ
9. 本書の執筆・編集は、須藤隆司が行った。
10. 出土遺物および調査に関する記録類は一括して、佐久市教育委員会文化財課に保管してある。

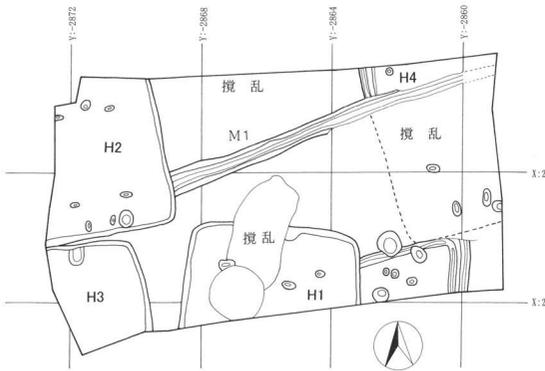
凡 例

1. 遺跡の略称 西一本柳遺跡XIII→INPXIII
2. 遺構の略称 竪穴住居址→H ピット→P 溝状遺構→M
3. 挿図の縮尺は、遺構1/80、遺物1/4である。なお、各図中にスケールを付したので確認されたい。
4. 挿図の色・スクリーントーンは、赤が赤色塗彩、編み目が粘土・貼床・堀方埋土、斜線が地山を示す。
5. 遺物観察表の△は推定値、*は現存値、単位はcm、g。
6. 土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修1995年版『新版 標準土色帖』の表示に基づいた。

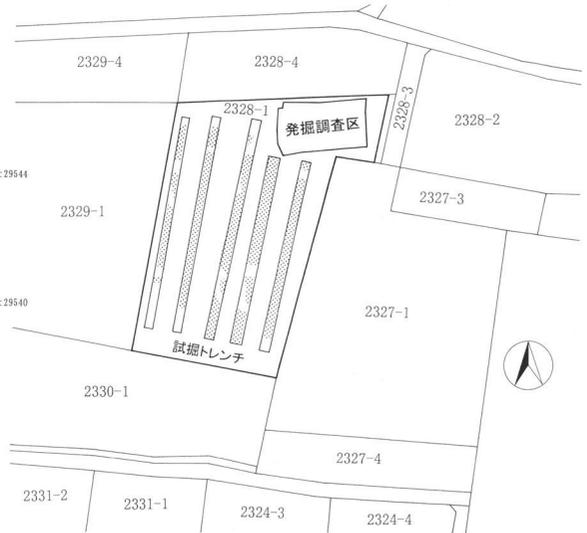
目 次

例言・凡例・目次

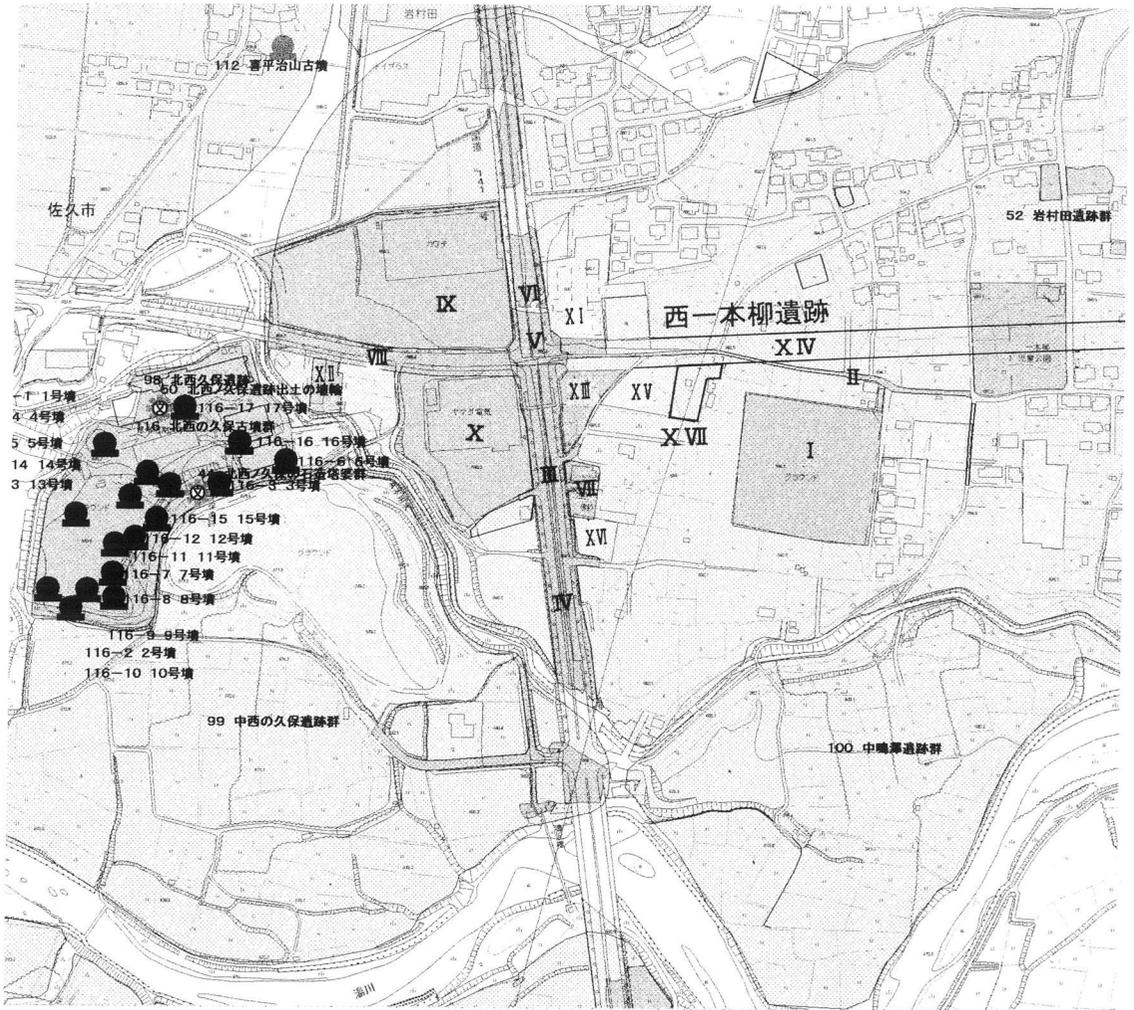
第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
1 立地と調査経過	1
第Ⅱ章 遺構と遺物	3
1 概要	3
2 竪穴住居址	3
3 ピット・周溝状堀方	4
4 溝状遺構	4



第2図 発掘調査全体図 (1 : 200)



第3図 発掘調査区と試掘トレンチの位置 (1 : 1,000)



第4図 西一本柳遺跡の発掘調査地点 (1 : 5,000)

第Ⅱ章 遺構と遺物

1 概要

調査区東側を主体に攪乱が広範囲に及び明確な確認調査は実施し得なかったが、浅間第1軽石流を検出面として、以下の遺構・遺物を確認した。

遺構 竪穴住居址4軒（弥生時代後期2軒・奈良時代2軒）、溝状遺構1基（弥生時代中期）

ピット7基、周溝状堀方2基

遺物 弥生土器（中期・後期）、土師器・須恵器（奈良時代）、石器

2 竪穴住居址

（1）H1号住居址（第5図、表1、写真3～7・17）

調査区中央南に位置する。住居址南半は調査区外であり、北半部の調査である。また、近代の井戸、ゴミ穴等で攪乱されており、北壁中央に位置するカマドの主要部が破壊されていた。

残存するカマド右袖からカマド主軸方位を推定するとN-6°-Eである。隅丸長方形を呈し、床面東西長は5.2mである。壁残高は調査区南壁セクション部で40cm。カマド右袖部は長さ40cm・幅35cmほどに地山を掘り残した部分と黒褐色粘土と礫を構築材とした部分の残存である。攪乱で主要部が破壊されているため詳細は不明である。ピットは3基確認されており、P1・2が支柱穴と考えられる。P1は32×25×60cm（東西長×南北長×深さ、以下同じ）、P2は55×35×60cmの規模である。また、P1の堀方は80×62×70cm。P2の堀方は78×45×80cmの規模を有し、それぞれ東西に2基分が重複した状況にあった。

出土遺物は、奈良時代（8世紀前半）の須恵器、土師器、砥石、敲石である。第5図1～4は、覆土中に廃棄された須恵器坏である（I区は住居址東側・II区は西側）。特に1と4は北壁際西部に底部を下にした2枚重ねで廃棄されていた（写真4）。ヘラ記号のある4が上で1が下の関係である。須恵器坏の底部整形にヘラケズリが用いられる。6の砥石は覆土、5の敲石はカマド右脇の床面（写真6）出土である。弥生時代の刃部を欠損した大形蛤刃磨製石斧であるが、その出土状態から、敲石原材として採取されたと想定できる。調査地点は弥生時代の大集落であり、磨製石斧はいわば二次原石産地の状態で存在していた場所である。使用は図表面下部・上端部・右側縁である。特に表面下部と右側縁下部の剥落が著しい。なお、側縁・上端部にはそれより弱い敲打による潰れがある。弥生時代においても破損した磨製石斧は転用されており、その経歴を厳密には判断できない。また、礫形状を残した6の砥石も弥生時代の可能性がある。

（2）H2号住居址（第6図、表2、写真8～10・18）

調査区北西端に位置し、M1号溝状遺構の上部を破壊する。北壁・西壁は調査区外であり完掘していないが、長軸方位N-10°-Wの隅丸長方形が想定される。床面南北長4.8m、床面東西長3.8m、壁残高20cmが確認できた規模である。支柱穴と考えられるピット4基（P1～4）、出入口部施設に関わるピット2基（P5・6）、貯蔵穴と想定されているピット1基（P7）、床下ピット2基（P8・9）が確認された。支柱穴P1～4は東西に長い楕円形を呈する。P1は25×15×50cm（堀方：32×32×50）、P2は30×13×40cm（堀方：35×25×40）、P3は26×10×40cm（堀方：38×20×40）、P4は40×15×40cm（堀方：50×25×40）の規模である。南壁際中央部の出入口に位置するP5・6は、支柱穴とは対称的に住居址長軸方向に長く、60cmの間隔をもって並列する。P5は15×32×25cm（堀方：20×34×30）、P6は13×30×30cm（堀方：26×40×35）の規模である。P6に接して存在するP7は南北方向に長軸を有する楕円形で、45×55×26cmである。柱穴的要素はなく土坑的であり、貯蔵穴と考えられ、通常遺物の出土も特徴的であるが、遺物は残されていなかった。P8・9は北東部のP1脇、東壁脇で床構築土以下の堀方部分で検出されたものである。P8が60×40×55cm、P9が34×38×50cmの規模である。炉は北部のP1・2間の中央部やや北よりに位置する。炉破壊に伴う炭化物の掻き出しを想定される炭化物の分布が周辺に存在し、焼土・構築土器などは存在していない。30×35×20cmほどの堀方が確認された。

出土遺物は、弥生時代後期土器群（第6図1～7）である。残存状態の良好なものは中央部やや南よりの

床面近くに底部を欠くが潰れた状態（写真9）で出土した櫛描波状文の甕（7）とその南側覆土中（写真9）の同じく底部を欠く櫛描波状文の小形甕（4）である。また、覆土中から櫛描波状文の甕（3・5・6）、内外面赤色塗彩の鉢（1）・赤色塗彩壺（2）が得られている。

（3）H3号住居址（第7図、写真11・12）

調査区西南端に位置し、西壁・南壁は開発範囲外であり調査は及んでいない。南壁と考えられる一部が調査区西南隅で確認されており、床面の南北長は3.1m程の規模にある。確認北壁長は2.5m、壁残高は35cmである。覆土は埋め戻された状況にあり、床面もはっきりした構築状態ではなかった。北壁中央付近にカマドの構築に関わると想定される浅い掘り込み部（50×50×10cm）が存在したが、ピットは確認されていない。不規則な堀方の深さは検出面から45～55cmを測る。以上の状態は通常の竪穴住居址とは考えられず、住居址とするならば構築途中での廃棄ということになる。

出土遺物の大半は、覆土中に存在した弥生時代後期土器群であり、僅かな奈良時代の須恵器・土師器破片が検出されている。形状から弥生時代後期よりは奈良時代の遺構と考えておくことが妥当であろう。

（4）H4号住居址（第8図、表3、写真13・14・19）

調査区北東端に位置し、M1号溝状遺構の上部を破壊する。北壁・東壁側が調査区外であり、大半が最近の攪乱で破壊されており全容は不明である。床面が確認できたのは西壁脇北側の極一部であり、西壁の立ち上がりを調査区北壁で確認したが、明確な状況の確認に至っていない。その床面には20×25×40cmのピット（P5）が存在していた。また、その南方において攪乱下にピットの堀方部分が4箇所確認された。その配置から東西方向に主軸をもつ支柱穴（P1）、70cmの間隔をもって並列し南北方向に主軸を有する出入り口部施設柱穴（P2・3）、その東脇に隣接する貯蔵穴（P4）と理解できる状態にあり、確認された床面と同じ住居址のものと判断した。P1は40×23×35cm、P2は30×48×34cm、P3は26×52×35cmの規模である。P4は大半が調査区外であり、確認部分は25×25×40cmである。

出土遺物は弥生時代後期の土器である。残存床面上に第8図1・2に示した内外面赤色塗彩の鉢2個体が並列して残されていた（写真13）。上記のピット配置は時期的に整合するものである。

3 ピット・周溝状堀方

調査区南東端のH1号住居址に破壊される位置で、ピット7基、周溝状堀方2基が確認された（第9図、写真15）。P2は焼土と考えられる堆積があり炉と考えることも可能である。その場合P1をその支柱穴、内側の周溝をその堀方と想定できる。また、土坑状のP4を炉として把握すれば、両脇にあるP3・5をその支柱穴、外側の周溝をその堀方と考え得る。ただし、P2・4に炭化物等の炉としての確実な状況が少なく、P2の焼土も地山の赤色火砕流堆積との区別の問題がある。また、支柱穴の配置は弥生時代後期のあり方としての推定であるが、東西に長い形状とは異なり、確定はできない。以上、可能性として指摘しておこう。なお、両者の間に小ピット（P6・7）が確認されている。P1は30×25×50cm、P2は52×40×45cm、P3は46×52×35cm、P4は70×80×35cm、P5は40×26×40cm、P6は25×28×22cm、P7は20×25×22cmの規模である。

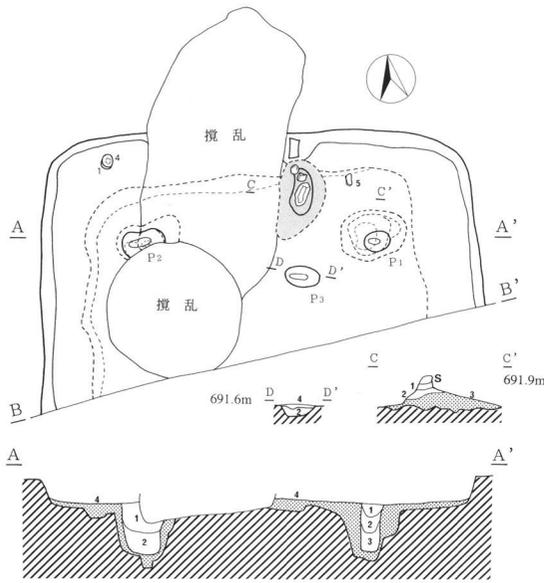
出土遺物は、P1覆土に弥生時代後期甕底部破片が存在していた。

4 溝状遺構

（1）M1号溝状遺構（第10図、表4、写真16・20）

調査区を東西に横断する。遺構上部を調査区東側では攪乱・H4号住居址に破壊され、調査区西側ではH2号住居址に破壊される。断面形は上部が開き下部が幅狭となる。検出面幅60～70cm、底面幅10～15cm、深さ90cm。東から西に傾斜し東西端底面比高差は40cmである。この溝状遺構の広がり、東側の西一本柳遺跡Ⅳの調査区で溝頭から本調査区に至る長さ80mが調査されており、西側の西一本柳遺跡Ⅳの調査区で本調査区からさらに西に延びる（長さ50m以上）状況が確認されている。

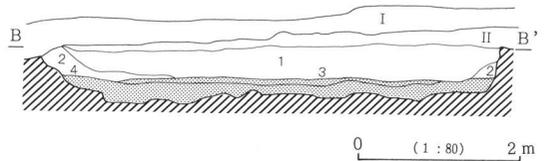
覆土1層から弥生時代中期土器群が検出されている。第10図1・2に壺・台付甕破片を図示した。なお、Ⅳの調査区では、覆土最上部に弥生時代中期土器群が一括廃棄されるあり方が確認されている。



- I層 黒褐色土(10YR3/2) 耕作土。
 II層 黒褐色土(10YR3/2) バミス・小礫を含む。耕作土。
 1層 黒褐色土(10YR3/2) バミス・ローム粒・炭化物を多く含む。
 2層 黒褐色土(10YR3/1) バミス・ローム粒・炭化物を多く含む。
 3層 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック(〜3cm)を多量に含む。
 4層 堀方埋土
 貼床状。
 ローム主体。黒褐色土を含む。
 上面黒褐色土を多く含む貼床状堆積。

- カマド
 1層 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土。炭化物・焼土粒を含む。
 2層 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土。
 3層 ローム・黒褐色土混土。貼床・堀方埋土。

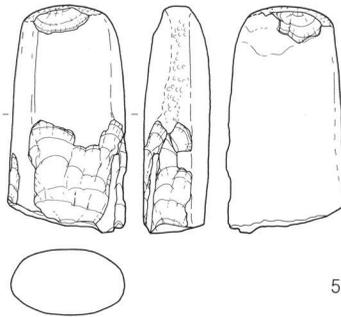
- ピット
 1層 黒褐色土(10YR3/2) バミス・ローム粒を含む。
 2層 暗褐色土(10YR3/3) バミス・ローム粒を多く含む。
 3層 暗褐色土(10YR3/3) バミス・ローム粒を多量に含む。
 4層 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物・焼土粒を多量に含む。



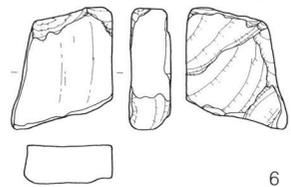
A・B 692m



4



5



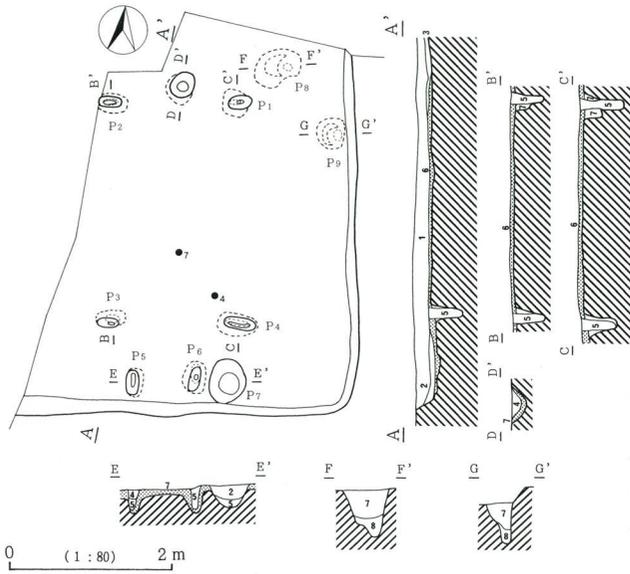
6

0 (1:4) 10cm

第5図 H1号住居址とその遺物

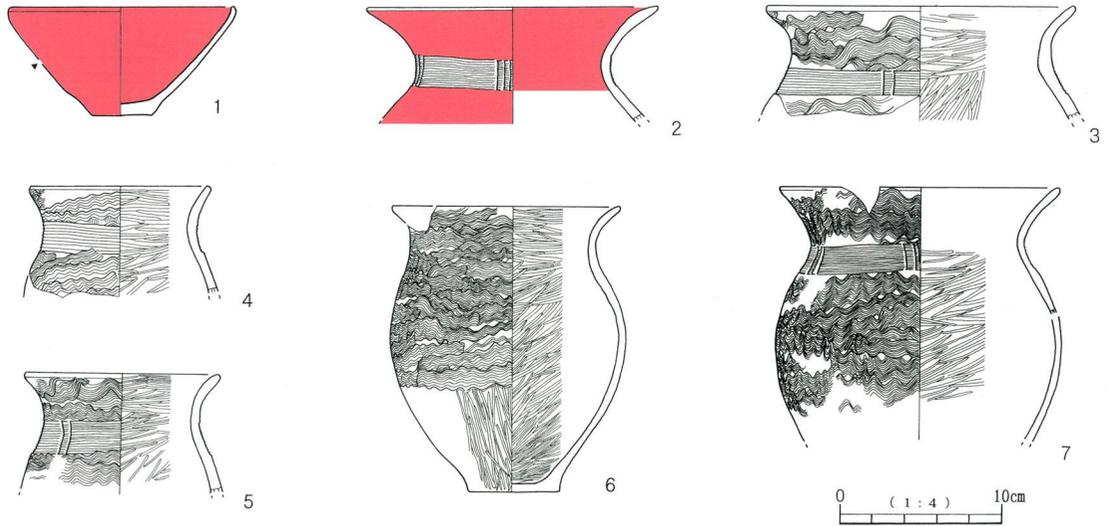
表1 H1号住居址の遺物観察表

No.	器種 材質	器形	法 量				成形・調整		出土位置	備考・実測方法
			口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重量	内 面	外 面		
1	須恵器	坏	15.0	10.2	4.1		ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	II区覆土	火擦痕あり 完全
2	須恵器	坏	△13.4	△8.4	3.8		ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り 胴部下部回転ヘラケズリ	II区覆土	回転
3	須恵器	坏	△13.8	△8.4	3.7		ロクロナデ	ロクロナデ 底部・ 胴部下部回転ヘラケズリ	I区覆土	回転
4	須恵器	坏	15.0	8.0	4.8		ロクロナデ	ロクロナデ 底部・胴部 下部手持ヘラケズリ	II区覆土	底部にヘラ記号 完全
5	石器 輝緑岩	敲石	14.0	7.3	4.1	774.6			I区床面	弥生後期の磨製石斧を 転用
6	石器 砂岩	砥石	7.5	6.2	2.4	156.8			I区覆土	



A・G 691.9m B～F 691.7m

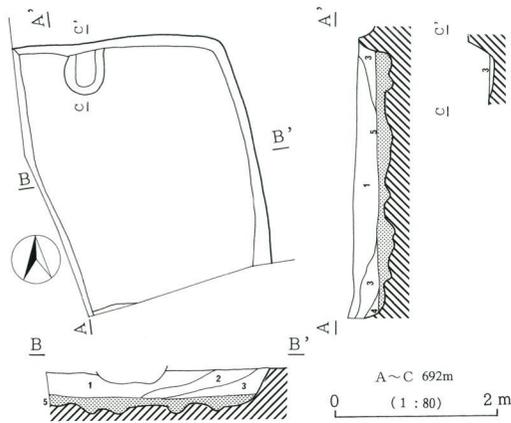
- 1層 暗褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を多く含む。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2) パミス・ローム粒を含む。
- 3層 黒色土(10YR2/1) 炭化物を多く含む。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・炭化物を含む。
- 5層 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を多く含む。
- 6層 ローム主体。黒褐色土を含む。貼床・堀方埋土。
- 7層 褐色土(10YR4/4) ロームを多量に含む。埋土。
- 8層 黄褐色土(10YR5/6) ローム主体。黒褐色土(～2cm)を含む。



第6図 H2号住居址とその遺物

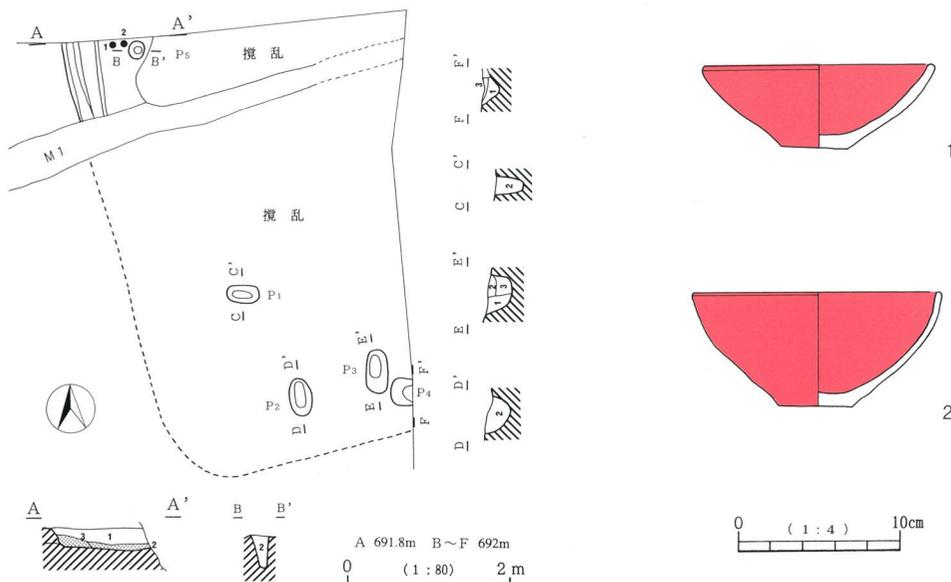
表2 H2号住居址の遺物観察表

No.	器種 材質	器形	法 量			重量	成形・調整		出土位置	備考・実測方法
			口径(長さ)	底径(幅)	器高(高さ)		内 面	外 面		
1	弥生	鉢	△14.0	3.8	6.7		ヘラミガキ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩	覆土	完全
2	弥生	壺	△18.0		*7.2		口縁ヘラミガキ 赤色塗彩 ハケ目	ヘラミガキ 赤色塗彩 頸部櫛描簾状文 (13本3連止め)	覆土	回転
3	弥生	甕	△19.0		*7.0		ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文 (10本2連止め)	覆土	回転
4	弥生	甕	11.2		*6.8		ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文 (9本)	覆土	完全
5	弥生	甕	△12.0		*7.3		ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文 (14本2連止め)	覆土	回転
6	弥生	甕	△14.0	5.6	17.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ 櫛描波状文	覆土	完全
7	弥生	甕	17.3		*15.7		ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文 (15本3連止め, 6単位)	床面	完全



- 1層 暗褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を多く含む。
- 2層 褐色土(10YR4/4) パミス・ロームブロック(～2cm)を多量に含む。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2) パミス・ロームブロック(～3cm)を含む。
- 4層 褐色土(10YR4/4) パミス・ローム粒を多量に含む。
- 5層 ローム・黒褐色土混合。堀方埋土。

第7図 H3号住居址



- 1層 黒褐色土(10YR3/2) パミス・ローム粒・炭化物を含む。
- 2層 褐色土(10YR4/4) ロームと黒褐色土の混合土。貼床・堀方埋土。
- 3層 褐色土(10YR4/4) パミス・ロームブロック(～3cm)を多く含む。堀方埋土。

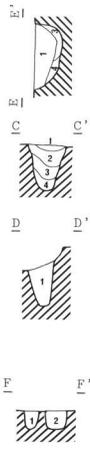
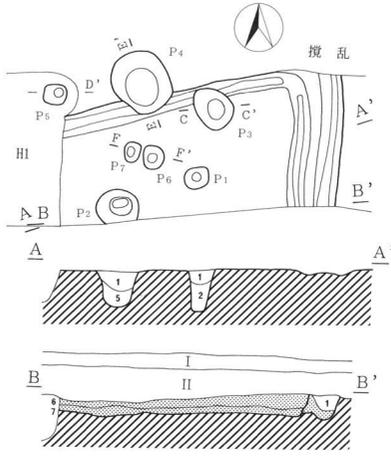
ピット

- 1層 暗褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) パミス・ローム粒を多く含む。
- 3層 褐色土(10YR4/4) パミス・ローム粒を多量に含む。

第8図 H4号住居址とその遺物

表3 H4号住居址の遺物観察表

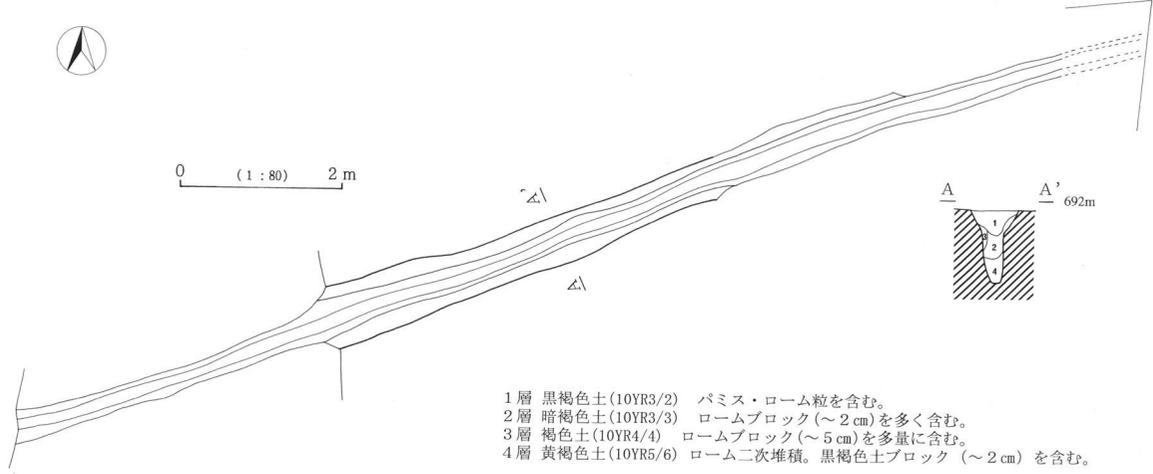
No.	器種 材質	器形	法 量				成形・調整				出土位置	備考・実測方法
			口径(長さ)	底径(幅)	器高(高さ)	重量	内 面	外 面	内 面	外 面		
1	弥生	鉢	14.3	4.1	5.1		ヘラミガキ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩	床面	完全		
2	弥生	鉢	15.3	4.6	7.1		ヘラミガキ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩	床面	完全		



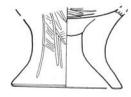
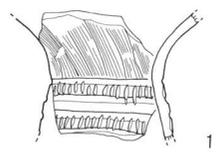
- 1層 黒褐色土(10YR3/2) 耕作土。
- II層 黒褐色土(10YR3/2) バミス・小礫を含む。耕作土。
- 1層 黒褐色土(10YR3/2) バミス・ローム粒を含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) バミス・ロームブロック(～2cm)を多く含む。
- 3層 暗褐色土(10YR3/3) バミス・ローム粒を多く含む。
- 4層 褐色土(10YR4/4) バミス・ロームブロック(～2cm)を多量に含む。
- 5層 暗褐色土(10YR3/3) バミス・焼土粒を含む。
- 6層 暗褐色土(10YR3/3) バミス・ローム粒を多く含む。
- 7層 褐色土(10YR4/4) バミス・ロームブロックを多量に含む。

0 (1:80) 2m A・C～F 692m B 691.9m

第9図 ピット・周溝状堀方



- 1層 黒褐色土(10YR3/2) バミス・ローム粒を含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック(～2cm)を多く含む。
- 3層 褐色土(10YR4/4) ロームブロック(～5cm)を多量に含む。
- 4層 黄褐色土(10YR5/6) ローム二次堆積。黒褐色土ブロック(～2cm)を含む。



0 (1:4) 10cm

第10図 M1号溝状遺構とその遺物

表4 M1号溝状遺構遺物観察表

No.	器種 材質	器形	法 量			成形・調整		出土位置	備考・実測方法	
			口径(長さ)	底径(幅)	器高(高さ)	重量	内 面			外 面
1	弥生	壺			*7.9		ナデ	ハケ目	1層	回転
2	弥生	台付甕		△6.8	*4.9		ヘラミガキ	頸部へラ描横線文 刻目 ハケ目 ヘラミガキ	1層	回転



写真1 遺構を検出する（東より）



写真2 遺構を掘る（西より）



写真3 H1号住居址（南より）



写真4 H1号住居址の遺物出土状態（東より）



写真5 H1号住居址のカマド（南より）

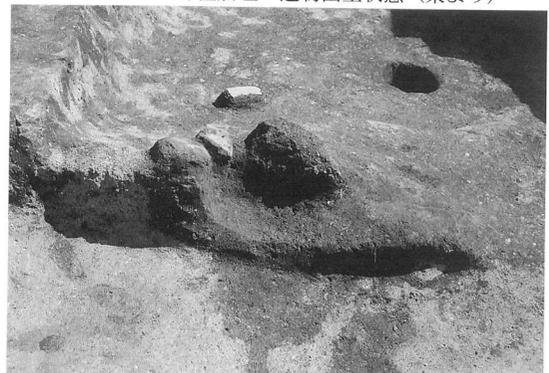


写真6 H1号住居址のカマド（西より）



写真7 H1号住居址の堀方（北より）



写真8 H2号住居址（北より）

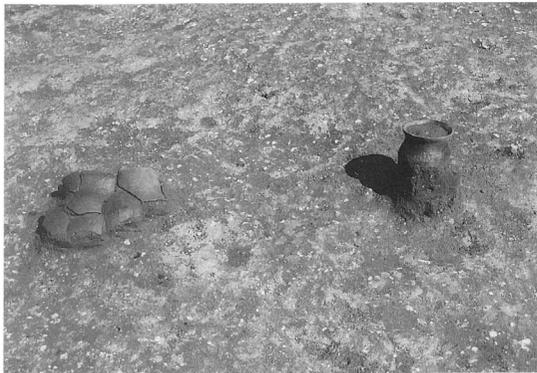


写真9 H2号住居址遺物出土状態（西より）



写真10 H2号住居址の堀方（北より）



写真11 H3号住居址（南より）



写真12 H3号住居址の堀方（南東より）



写真13 H4号住居址の遺物出土状態（南より）



写真14 H4号住居址のピット（南より）



写真15 住居址？のピット（北より）



写真16 M1号溝状遺構（東より）

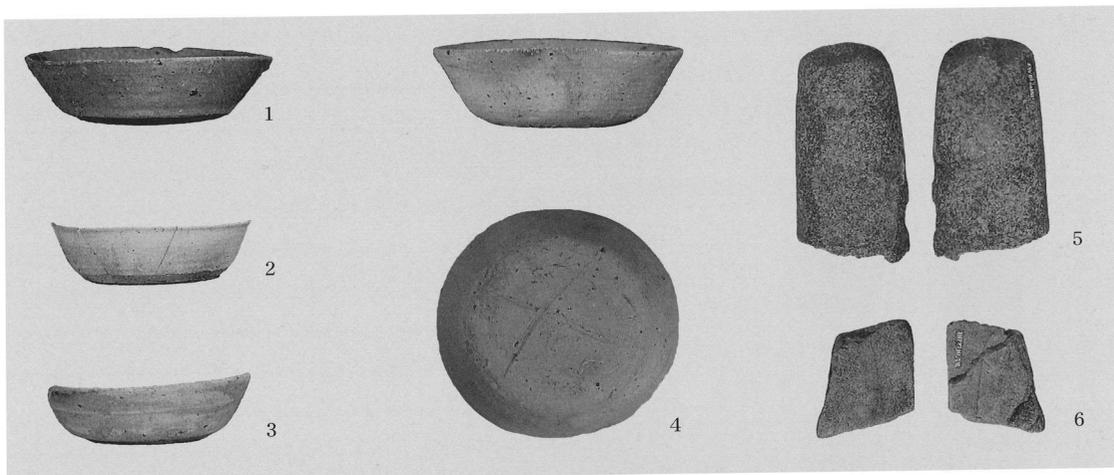


写真17 H1号住居址の土器と石器

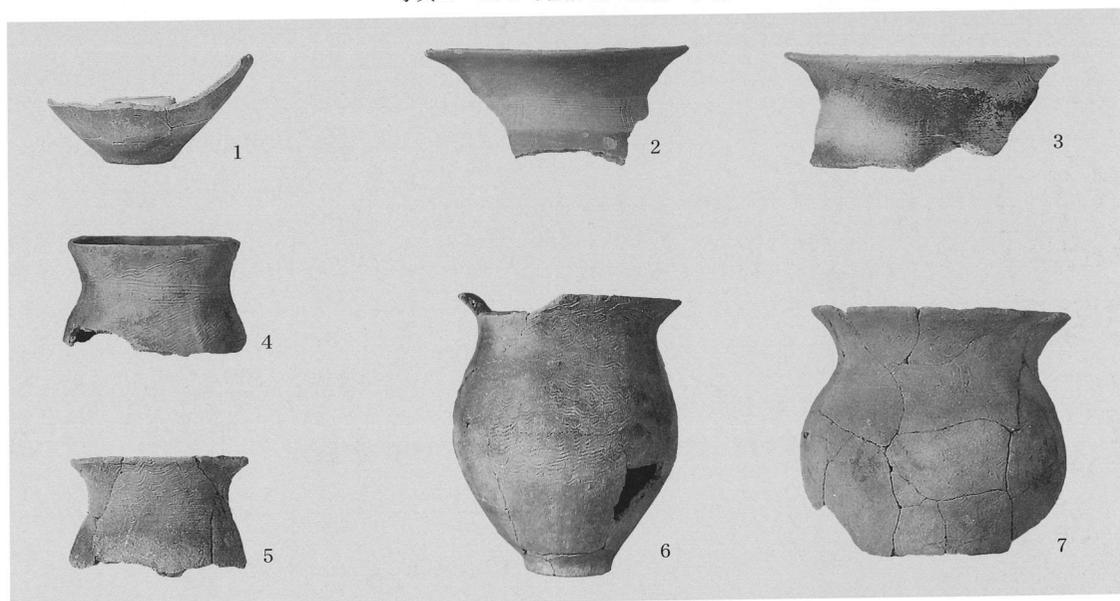


写真18 H2号住居址の土器

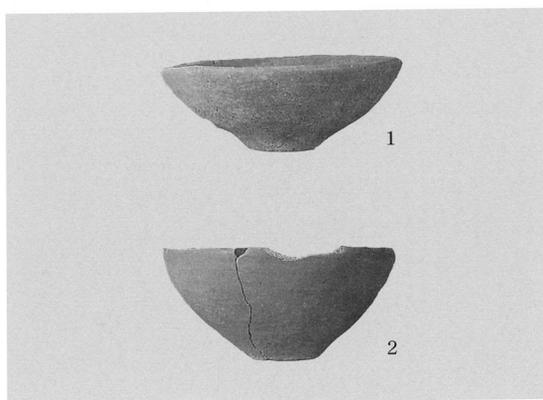


写真19 H4号住居址の土器

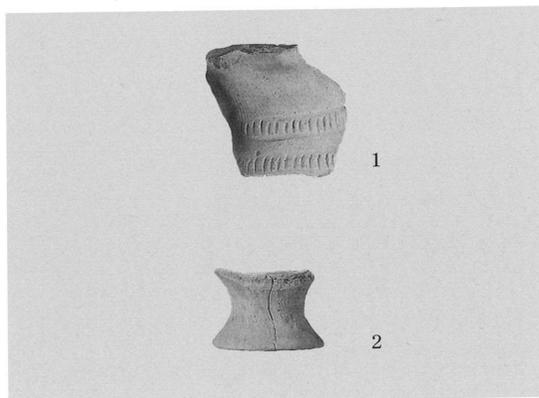


写真20 M1号溝状遺構の土器

報告書抄録

書名	岩村田遺跡群 西一本柳遺跡Ⅶ
ふりがな	いわむらだいせきぐん にしいっぽんやなぎいせきじゅうなな
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第169集
編著者名	須藤隆司
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2009. 3. 25
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	岩村田遺跡群 西一本柳遺跡Ⅶ
遺跡所在地	佐久市岩村田字常木上2328-1
遺跡番号	52
緯度	36° 15' 59"
経度	139° 48' 5"
調査期間	2008. 9. 30~2008. 10. 9
調査面積	102m ²
調査原因	店舗建設
種別	集落址
主な時代	弥生・奈良時代
遺跡概要	遺構 竪穴住居址・溝状遺構・ピット 遺物 弥生土器・土師器・須恵器・砥石・敲石（磨製石斧転用）
特記事項	

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第169集
岩村田遺跡群 西一本柳遺跡Ⅶ
長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡Ⅶ発掘調査報告書

2009年3月25日

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司
